

Grooved-electrode piezoelectric resonator

Patent Number: ☒ US4384232
Publication date: 1983-05-17
Inventor(s): DEBELY PIERRE (CH)
Applicant(s): EBAUCHES SA (CH)
Requested Patent: ☐ JP56065517
Application Number: US19800195775 19801010
Priority Number(s): FR19790025562 19791015
IPC Classification: H01L41/04
EC Classification: H03H9/13, H03H9/215
Equivalents: ☐ FR2467487, ☐ GB2063559

Abstract

A tuning fork resonator has electrodes 7 and 8 on the opposite main surfaces of each tine and lateral electrodes 9 and 11 along the edges of each tine. The electrodes 7 and 8 of one tine are connected to the electrodes 9 and 11 of the other tine and to one pole of the supply. The other electrodes are similarly connected to the other pole. The electric fields extend parallel to the main surfaces of the tines. In order to improve the uniformity and density of the fields, grooves 4 and 5 are etched along one main surface of each tine and the electrode 8 has parts extending into the grooves. Various modifications are possible including omission of the part of the central electrode between the grooves, provision of a single, central longitudinally groove and the provision of opposing grooves in both main surfaces. Electrical power consumption is reduced.

Data supplied from the esp@cenet database - 12

⑤ 日本国特許庁 (JP)

⑥ 特許出願公開

⑦ 公開特許公報 (A)

昭56-65517

⑧ Int. Cl.

識別記号

庁内整理番号

⑨ 公開 昭和56年(1981)6月3日

H 03 H 9/21

9/13

9/17

7190-5 J

6125-5 J

7190-5 J

発明の数 1

審査請求 有

(全 5 頁)

⑩ 圧電振動子

スイス国ジュネーブ・リュウ・

フェルディナント・ホトラー21

⑪ 特 願 昭55-143059

⑫ 出 願 人

エボーシユ・ソシエテ・アノニ

⑬ 出 願 昭55(1980)10月15日

ム

優先権主張 ⑭ 1979年10月15日 ⑮ フランス

スイス国ノイシャテル・フオー

(FR) ⑯ 7925562

ブル・ドウ・ロオピタル1

⑰ 発 明 者 ビエール・デブリイ

⑱ 代 理 人 弁理士 矢野敏雄

明 細 書

1 発明の名称

圧電振動子

2 特許請求の範囲

1. その1つの表面上に第1電極を有し、第1電極は第2電極と結合して、上記表面に対して実質的に平行な方向に電界を発生する圧電振動子において、上記表面に溝を有し、第1電極の少なくとも1部分がこの溝の中にあるように設けられることを特徴とする圧電振動子。

2. 第1電極の1部が、電気的に相互に接続され、また溝の2つの側面に設けられるような、特許請求の範囲第1項記載の振動子。

3. 2つの平行な面を持つチューニングフォーク（音叉）形状をなし、これら各歯の1つの表面状に、歯の横面から十分に等距離を保った縦方向の溝を有するような、特許請求の範囲第1又は第2項記載の振動子。

4. 第1表面に設けられた溝とは反対に位置す

るよう、振動子の各歯の他表面に設けられた他の縦方向の溝を有するような、特許請求の範囲第3項記載の振動子。

5. 2つの平行な面を持つチューニングフォーク形状をなし、これら各歯の1つの表面上に、歯のそれぞれの横面から実質的に等距離を保った位置に設けられた2つの縦方向の溝を有するような、特許請求の範囲第1項又は第2項記載の振動子。

6. 第1表面に設けられた溝とは反対に位置するよう振動子の各歯の他表面に設けられた他の2つの縦方向の溝を有するような、特許請求の範囲第3項記載の振動子。

7. 2つの平行な面を持つチューニングフォーク形状をなし、チューニングフォークの各歯の表面の主要面上の中央電極と、チューニングフォークの歯の横断面を横切る横電極とを有し、各歯の中央電極の少なくとも1つは、全体的に又は部分的に各々の主要面の1つ又はそれ以上の溝の中に設けられるような、特許請

(11)

(12)

次の範囲第1項から第8項までのいずれかに記載の振動子。

3 発明の詳細な説明

本発明は、圧電結晶（ピエゾクリスタル）振動子、特に（限定するものではないが）チューニンゴフォーク（音叉）形状をなす振動子に関するものである。励起電界は振動子の表面の1つに平行な方向に作られ、電界を作るための電極の1つは、振動子の上記表面上に設けられる形式の振動子に関するものである。

圧電結晶振動子は、時計および時計を含むあらゆる種類の電子装置や電子機器におけるタイムベース（基準時間）を形成するために極めて有用なものである。多くの適用例において、チューニンゴフォーク形の結晶振動子が、特にその特質として有している小型化し得るという観点から極めて有利な形状であることが、立証されている。また、同様な適用例において、チューニンゴフォークの振動を維持するために必要なエネルギー消費を、可能な限り減少させる

(4)

ということも、等しく望まれており、特に駆動エネルギーが時計又は携帯用電子（計算機）などのような携帯機器に内蔵されて極めて小さな寸法の電池から供給される場合は、ことさらである。本発明による振動子は、従来の振動子よりさらに均一な、しかも局部的に強力な励起電界を発生させることによりエネルギー消費を抑えるという手法を用いて設計されたものである。これにより、本発明は単にチューニンゴフォーク形状をなす結晶振動子のみならず、他のあらゆる形状の振動子、即ち励起電極が設けられた結晶面に平行な励起電界を生ずるようなあらゆる振動子に適用できるものである。

本発明は、第1電極が振動子の1つの表面に設けられ、第2電極との相互作用によつて上記表面に十分に平行な方向を有する電界を発生し、この第1電極は少くともその1部分が溝の中に設けられているような、圧電結晶振動子を提供するものである。

チューニンゴフォーク形振動子は以前にも説

(4)

明されており、例えば米国特許明細書第3,989,964号で説明されているように（第1図参照）、多くの場合、チューニンゴフォークは水晶結晶によつて形成され、ギャップにより分割された2つの平行な歯を有している。それぞれの歯には逆性の逆な電極を形づくるための導電性被覆物が付加され、これら電極は歯の中に、チューニンゴフォークを振動させるための圧電歪を発生させる交番電界を作り出すことができる。電極は、各歯の平面における交番電界が歯の長さ方向を横切るように、また2つの歯の間において180°の位相関係となるように配置されて、エネルギー源に接続される。

本発明の実施においては、チューニンゴフォークの厚さよりも少し深さを持つ、少くとも1つの溝が、各歯の主要面のうちの少くとも第1の表面上に縦に設けられ、また各歯における励起電極は、歯の表面の主要面に設けられた中央電極と、チューニンゴフォークの歯の横断面を横う横電極とから構成され、各歯の中央電極の

(4)

うちの少くとも1つは、完全に又は部分的に各々の主要面の1つ又はそれ以上の溝の中にあるように構成されている。

電極は、それ自体は公知の手法によつて電気的に接続されるよう設計されている。1方の歯の中央電極と他方の歯の横電極とが、励起電界の1つの極に接続され、逆に第2の歯の中央電極と第1の歯の横電極とが反対の極に接続される。これらの接続はチューニンゴフォーク自身の上に沈着された適切な巾を有する導電性コーティングによつて行うことができる。動作においては、歯の平面上の交番する横方向電界の結果としてのチューニンゴフォークの歯のたわみにより、振動子の振動が持続されることが可能となる。

チューニンゴフォーク振動子に本発明を適用する1つの事例においては、歯の厚さにくい込む中央電極を配置することが、圧電結合を増加させる。同等の寸法を有するものであれば、この結合の増加は振動子の特性要因（ Q ）の増加

(4)

をもたらし、そのために、一時的な振動等価回路において損失を発生させる阻性抵抗の減少の結果として、振動子が接続される振動回路の電流消費を少なくする。換言すれば、同等の特性要因を有するものであれば、この配置は振動子の寸法を減少させるものである。

1つの構成方法では、単独の溝が各面上に設けられる。溝の寸法は、その側面が可能な限り曲の横断面に近くなるように決められる。即ち振動子の必要な機械的強度を維持し、その製造技術上許される範囲において近づくよう、位置決めされる。同様に、この溝は可能な限り深いほうが、結果は良い。

さらに、曲の溝と横断面の間に位置する部分は、十分に堅く、また溝がないテューニングフォーク部分に振動を伝達することが可能であるように、曲の中央部分とも十分に堅固に結合されていることが、必要である。しかし、あらゆる場合において、この装置の条件は、曲の横断面から溝の側面までの距離による製造技術上の

(11)

分に分割して、それらを、1つ又はそれ以上の溝電極で電気的に接続することにより、電極材料の節約が行なわれる。溝の側面に設けられた中央電極のこれらの部分のみが、振動子の励起電界を発生するために作用することは、事実である。

他の構成においては、テューニングフォークの各曲の主要面のうちの1つ又は両方に2つの溝が設けられる。これらの溝は曲の横断面に可能な限り近い位置に設けられ、これについても上に述べたと同様の制約が存在している。

溝の形成に関しては何の技術的問題もない。写真製版により振動子を製作するための良く知られた処理工程において、通常クロム又は金の金属層が水晶結晶板上に付着させられる。この金属層は振動子の形状をなす範囲のみを残すような方法により他部分が取り除かれる。水晶板は次に、金属層によって保護されていない部分を取り除くため、ふつ化水素酸によってエッチされる。

(12)

制約により制限されるものである。

実際には、材料の厚さは溝を切つてもまだ余りがあり、また溝の側面と振動子の曲の横断面との間の距離は振動子の厚さの少くとも3倍に等しい値を保つように設定される。

このような構形は、振動子のただ1つの主要面上に設けられて他表面は平面であるか、又は両方(両面)の主表面に設けられるかの、どちらかである。この後者の場合、曲の断面は対称であつて、これは振動子の曲の主表面における平面のゆがみを無視できるようにするものである。

振動子の振動モードは内部的には励起電極の長さに依存することが知られている。それ故、望ましい振動モードの関数として溝の長さを、場合に応じて選択できることは、明らかである。

溝が振動子の主表面の1つ、又は主表面の両方に設けられて、それが十分に大きければ、中央電極を少くとも溝の側面に位置する2つの部

(13)

振動子の表面の片側のみを溝を作るためには、表面を保護する金属層の望ましい位置にスロットが設けられる。次に水晶は、片側の面においては、スロットを通してふつ化水素酸によって侵食され、一方、両面上の保護されていない他部分は直接侵食される。この様に、振動子の外形形状がふつ化水素酸によってエッチされている間に、溝は水晶の厚さの約半分に等しい深さまで、エッチされる。

振動子の両方の主表面に溝を作るためには、エッチング処理に補足的工程が追加される。ふつ化水素酸によるエッチングは、溝を設けるべき位置に全くスロットを有していない振動子外形形状を持つ金属保護層を用いて開始される。このエッチングは水晶が振動子の外形から十分に取り除かれる前に中止され、次に溝の設けられる位置に相当する金属層にスロットが作られる。ふつ化水素酸によるエッチングが再び開始され、水晶が完全に振動子形状にエッチされるまで継続される。必要な溝は、金属層に作られ

(14)

振動子断面(第1図)は平指であり、1万倍
面(第2図)には2つの縦方向溝4、5が各端
にカットされており、これら溝は拡大した断面

歯の先端に近い部分では、導電帯14が各歯の2つの横電極を相互に接続している。フォータの根本、即ち2つの歯に共通するベース部の近くにおいて、他の導電帯15が各中央電極7を他の歯に設けられた横電極に接続し、さらにコンタクトエリア17および18に接続している。各コンタクトエリアはチューニングフォータの1つの歯の中央電極と、他の歯の2つの

本質的には、各歯は、2つの中央電極と2つの換電極とを有している。中央電極は歯の2つ

図 4、5 の存在は結晶の X 軸に沿つて均一な電界を発生させる上で有効なものである。それらの動きは、比較図（第 4 図、第 5 図）に示される。これらの図では、動作状態で発生する電気力線が振動子の 1 つの端の断面に表わされている。第 5 図の場合、チューンインフォークは溝を持たず、中央電極 21、22 は、溝の側面に公知手法によつて設けられた横電極と共に動作に関与する。本発明による振動子は第 4 図に示され、ここでは今までに説明した実施例に代ける第 4、5 と類似の溝 26、27 を振動子背面に有しているのみならず、溝の側面主表面上に同様に形成された対称溝 28、29 をさらに有している。横電極 31、32 はこの例においては振動子の横側面内のみ設けられ、主表面上への、へり越え延長はしていない。また中央電

極を構成する金の成層は各主表面上に2つに分割されて設けられ、鋼の堅固のみ金コーティングがされている。2つの電極部分は導電帯(図には示していない)によつて鋼の終端部にかいて電極の同一極に必然的に接続されている。鋼は第3図に示すものよりも狭い。これは前面と後面の鋼の間の水晶の厚さ、例えば約50ミクロン程度、を確保するために必要なことである。

第8図は、他の構成によるチューニングフォークの2つの歯33および34の断面である。歯35、36、37および38はこれら歯の中にカットされ、鋼の1つ1つは各歯の各主表面上に設けられている。中央電極39、40、41および42はこれらの鋼の断面に伏着され、横電極43、44、45および46と作用して、上に述べた例と同様に、チューニングフォークを振動状態とするための必要な横断電界を発生させる。

要するに本発明は各歯の振動の主表面上に電

極7および8を、また各歯の側面に沿つて横電極9および11を有するチューニングフォーク振動子に関するものであり、1つの歯の電極7および8は他の歯の電極9および11と接続され、さらに電極の1つの極と接続され、また他の電極も同様手段で接続されて電極の他極に至るものである。電界は歯の主表面に平行に発生する。電界の均一性および強度を向上させるため、歯7および8が各歯の1つの主表面に沿つてエッジされ、また電極8は鋼の中にまで伸展した部分を有する。多くの改良実施が可能であつて、それらは鋼に関する中央電極部分の省略、信号の配置、縦方向中央電極、および主表面の両面両面での鋼の配置、などである。消費電力が減少する。

4 図面の簡単な説明

第1図は本発明を実施した振動子を、その1つの主表面側から見た図であり、第2図は同じ振動子を反対側の主表面から見た図であり、第3図は第1図の線Iに沿つて切斷した振動子の

歯の断面を表わす図であり、第4図は本発明を改良実施した振動子の歯の1つを表した図であり、第5図は第4図と比較するため、鋼のない公知の振動子に生ずる電氣力線を示した図であり、第6図は本発明の他の改良実施を施したチューニングフォーク振動子の2つの歯を表わす図である。

1…水晶振動子、2、3…歯、4、5…鋼、6…補足沈着部、7、8…中央電極、9、11…横電極、14、15…導電帯、17、18…コンタクトエリア、26、27、28、29…鋼、31、32…横電極、33、34…歯、35、36、37、38…鋼、39、40、41、42…中央電極、43、44、45、46…横電極

代理人 弁理士 矢野 敏 雄

